

第9回「他者の幸せを求めて（一）」

士・農・工・商と神と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第9回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

株式会社フジテレビ KIDS 東京都港区台場 2-4-8

今回は「他者の幸せを求めて」の第一回をお話しします。

前回まで、人間は長い歴史の中、組織というものを作ってきたというお話をしました。

その最初は、古今東西を通じて、血のつながった者同士が集まる「共同体」でした。

東北アジアの儒教的社会では、その血のつながりの「血縁共同体」がずっと続き、今日にまで、まだその力を持っているという状態です。

しかし、この長い血縁共同体の歴史の中で、どの人もその血縁共同体の中で一生を終えたかという、実はそうではありません。

人間は動物ですから、本来は利己主義です。

自分の幸せを大事にするのは当たり前です。しかし、その同じ人間の中で、自分の幸せ以外に、他人の、他者の、血のつながっていない人達の幸せを実現したいと、そういう人が出てきます。

自分の幸せだけでなく、血が繋がっていなくても、他者の幸せをと思う人はいるわけです。そういう人たちは、どこで自分の気持ちを表すことができるか。

中国をはじめ、朝鮮半島、それから日本という東北アジアでは、大部分が血縁共同体の中で生きていきます。そこにあって、他者の幸せを実現したいと思う人達が、どういう仕事をするか。

それは限られます。

当時、仕事と言えば、その大半は農業です。今日でも中国では農業従事者は多い。日本ではもう、専業農家というのは、職業従事者の3パーセントを切っているのではないかと思います。

しかし、中国ではまだ5割を超えているのではないかと思います。

【農業・工業・商業】

古代では、職業と言えば、圧倒的に農業です。人口のほとんどが農民であったと思われます。

農業にはつきものの、鋤、鋤、鎌など鉄製の農具、また軍事的に武器や武具などを作る工業もあることはありました。

しかし、需要も少なく、規模も単純なものでしたら、そんなに多くの人が工業に従事することはありませんでした。

商業はどうか、商業もありました。しかし今日とは違い、交通手段が非常に弱いものでした。

今日では、大規模な物流が構築されており、どんなに大量なものでも運ぶことができます。

当時はせいぜい牛か馬に車を引かせる程度しか、物を運ぶ手段がなかった。商業の範囲は、人間が運ぶ程度で、当然今日のように盛んではありませんでした。

工業、商業は人口の割合からいうと非常に少なく、圧倒的の大部分は農業。そういう時代でした。

そのような時代に「他者の幸せを実行しよう」

そんな職業があるかという、たった一つありました。

それは行政官僚。あるいは政事を担当する「為政者」。そういう仕事でした。

【他者の幸せを考える職業「士」】

この仕事ならば、全体の組織を考え、他者の幸せを考えることはできます。このような立場の人を「士」と言います。

合わせますと「士・農・工・商」。四つの職業に分かれます。

他者の幸せを実行しようと思うと、農業・商業・工業という自己の幸せのためにある職業以外には、「士」になるより他の道はありませんでした。

他者の幸せを具体的に行いたいという人は「士」になろうとします。

この「士」は、やはり少し条件がありますが、その条件についてはまた順を追ってお話しします。

「士・農・工・商」これは職業分別です。そのうちの「士」は、他者の幸せのために努力する、生きる職業です。

【「士」とは】

それでは、この「士」が、今日ではどういうものにあたるか。

今日では、職業は非常に多様化しておりますから、他者の幸せのために働く仕事場はずいぶん増えております。それはみなさんが周りをご覧になれば、わかると思います。

しかし、孔子が生きている当時は、非常に少なかった。

「士農工商」人間世界の仕事というものは、これで尽きるかと思えます。しかし「士農工商」だけで生きていたのかと言うと、実はそうではない。

人間社会は不思議なものです。人間が人間達のルールを作っていく。しかし、実はこれ以外の世界があったのです。

それは、不思議なこと、人間以上のもの、自分よりはるかに力の有る者のイメージ。それをひとこと言いますと、「神」ということでしょう。

この「神」というものを、人間は持とうとします。事実、心で求めているところもあります。ですから、古代社会では「士農工商」という人間世界に加えて、「神」というものを意識していたと言えます。

さて、そうになると宗教という問題がそこに関わってきます。

全世界、遠い昔から今日に至るまで、人間の集団において、この「神」「宗教」というものを無視することはできません。古代社会ですと、非常に強く求められていました。

それはどんな宗教であったかということです。これには特色があります。

いっしんきょう
【一神教】

今日、欧米並びに中近東のあたりでは、順番から言えば、「ユダヤ教」「キリスト教」「イスラム教」の三つの宗教が社会的に大きな力を持っています。

この三つに共通するものは、「一神教」ということです。

「一神教」というのは、あがめる神は御^{おひとかた}一方だけです。その神は全知全能の神です。あらゆることをご存知で、あらゆることができなさるといふ絶対的な「神」。これが「一神教」。

「ユダヤ教」「キリスト教」「イスラム教」は「一神教」ですが、考え方が違って、三つに分かれています。同じ「一神教」です。

この「一神教」がヨーロッパから中近東にずっと影響を与えてきました。もちろん今日では、それはアフリカにも広がり、南米や東南アジアにも広がっています。

【東北アジアの宗教観】

では、我々の儒教はどういうものであるか。「一神教」、そんなことはありません。

なぜ、「一神教」が儒教的社会で認められなかったかという点、理由は非常に簡単なことです。

「一神教」のように、人間を超えた神を信仰するということは、全中国を統一する「皇帝」の上に「神」がくるということになります。

これは皇帝にとって許すことはできなかった。皇帝をもって最高の権威とするというのが、中国の国家の在り方ですから、皇帝よりも力のある、唯一絶対の「神」を置くことは理論上できません。認められません。

皇帝は天などを祭りますが、それは自分の政権の根拠として祭るのであって、日常的に祈る対象ではありません。

ですから「一神教」が発達する、あるいは求める根拠はもともとないのです。

東北アジアの中国では「一神教」は、はじめから存在していません。

中国では、宗教家達はすべて皇帝の下にあって、皇帝の指揮のもとにあったという歴史があり

ます。

同じく我が国においても同じです。たとえば正式の僧侶は、政治の下にあって、宗教的活動をする。公務員でもあったわけです。

政治の上に宗教がくるようなことはありませんでした。

ですから「一神教」のように、絶対の「神」が政治の上にあることを認めることはできなかったのです。中国では「一神教」は発達しませんでした。

後になってキリスト教徒になった人は多少いますが、大きな勢力とはなりません。今日の我が国においてもキリスト教徒がそれほど増えないことも、このような歴史と関係があるかもしれない。

では、「一神教」でなくて、「神」は存在するか。やはり存在します。

「一神教」ではなくて、「多神教」です。神々がたくさんいらっしゃる。そういう神です。

たしんきょう
【多神教】

「一神教」の神は御一方だけですから、その方が全知全能。

「多神教」は、それをバラバラと砕いて、神々はそれぞれの専門の神として在ります。

たとえば農業の神様、酒造りの神であるとか。

「多神教」の世界では、ある一つの分野についての専門的な「神」です。

今日の我が国にも、その雰囲気は残っております。

子どもが受験するときには学問の神様、天神さんにお参りして、合格を祈願する。天神さんは学問の神という一種の専門的な神様です。あるいは商売繁盛を願うときは、恵比須さんという神様にお参りします。病気ですと、仏教ですけれども、薬師如来。病気を治してください。

そういうところをお願いに行く。これが「多神教」の姿です。

「多神教」には、それぞれの分野の優れた「神」がいらっしやいます。その神がお一人であらゆることを取り仕切ることはありません。

意地悪く言いますと、人間の都合でお参りする神々、仏ということでしょう。

もっと言いますと、「神」を頼ると言いながら、実は人間主導です。

今回は、薬師さんに病気を治してもらうようお願いしよう、今回は、子どもの入試合格をお願いしよう、ということだから、結局は人間が主導しています。

これでおわかりのように、儒教は「多神教」です。

「一神教」のような絶対的な存在を置くということはありませんでした。

これが「一神教」の世界で育ったヨーロッパの人々には、なかなか理解できないところです。

逆に多神教における世界で育った我々は、「一神教」の世界がなかなか理解できない。

しかし、この神々は、人間世界の上いらっしやって、他者を幸せにする存在であります。

そして「多神教」の、ある特殊な考え方が儒教の発生と非常に深い関係があります。

それは、また回を改めてお話ししましょう。

今回は「他者の幸せを求めて」の第一回でした。